
それは七つばかりの頃

皇 凧沙

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

それは七つばかりの頃

【コード】

N0958E

【作者名】

皇 凧沙

【あらすじ】

少女が閻魔堂で出会う不思議の話

それは七つばかりの頃

それはまだ七つばかりの頃だった

その頃からえんは闇に怯えぬ子どもであった。二親は土手端で客を待つような仕事をしていたから、夕に出て行き夜中まで帰っては来ない。

それをよいことに、えんは辺りが闇に包まれる頃になると家とも呼べぬようなねぐらを這い出し、夜半の野辺でひとり遊びをするのが常だった。

春の宵、つい先頃まで冷たく吹き付けていた北風は生暖かい南風に変わり、どこか生臭いような春の匂いが辺りを包んでいる。その日もえんはねぐらを抜け出し、やっと春草の伸びかけた土手際の小さなくぼみにうずくまっていた。

川向こうには、行き交う人もあるらしく、時折り提灯の明かりが揺らぎ、人声もかすかに聞こえてくる。おとうとおかあも向こう岸まで出張って行ったのだろう。この分では今日も帰りは遅いに違いない。

きょうはなにをしようか。

小さなくぼみの中に身を屈めて、えんはゆっくりと考える。向こう岸から人の声が聞こえてくる。彼らが、けして川のこちら側には来ないことを、えんは知っていた。

暗くなつてから いやたとえ日のあるうちでも、まともな人間はこんなところへは足を向けない。えんのねぐらから少し奥へ入ったところには、刑場があるのだ。

そうだ、けいじょうへいってみようか。

そう思ったのは、その日の昼前罪人の処刑があつたからである。

いつもは川のこちら側に人が集まることなどありはしないが、罪人のお仕置きがあるときばかりは別である。罪人の処刑というものを、えんはものごころもつかないうちから知っていた。どこか打ち

沈んだ明るさと後ろめたさの混じる賑わい。おとなたちの尋常ではないざわめきと、押し殺した囁き。同情と嘲笑。悲痛さと酷薄さ。そして、好奇の目

えんはそれを、すこしばかり楽しみにさえしていた。

昼間引かれてきた罪人は、薄汚れたような中年のおとこだった。

捨て札を先頭に、刺股や袖絡を持つ非人たちに囲まれ、はだか馬にのせられて刑場へ引かれていく罪人を、えんはやじうまたちのかけからのぞきみていた。

えんのねぐらの掘った小屋の前を過ぎれば、刑場は目の前である。どれほど豪胆な罪人であっても、ここまで来れば血の気が引く。気の弱い罪人なら泣き叫び、小便をもらす。つま先からぼたぼたと滴をたらしながら引かれてゆく罪人を、えんも見ることがあった。

今日のおとこは、泣き叫ぶでもなく、強がるでもなく、押し黙ったままだだ呆然とした顔で揺られていた。えんはそつとやじうまの間をくぐって罪人を追った。矢来で囲まれた刑場の中には、すでに仕置きの準備ができていた。敵めしい姿をした見届け役の役人と、切り役。罪人が据わる場所には粗莖が敷かれ、血溜めの穴が四角に掘られている。

しかし、罪人の列は刑場の入り口を少し左へそれて、小さな堂の前で止まる。堂の中には、怖ろしげな顔をした閻魔さまが奉られている。ここで罪人は最後に罪を懺悔して、刑場にのぞむのだ。

罪人が馬から下ろされ、堂に入る。しばらくの間、堂の戸は閉じられ、やじうまたちのざわめきが大きくなる。寸刻の後、再び扉が開いて罪人が引き出される。なにか感じるところでもあったのか、罪人の嗚咽する声が聞こえた。

えんは、そのおとこが嗚咽を漏らしながら土壇場に引かれてゆき、一刀の元に首を落とされるさまを、ただ見ている。怖ろしいとも、可哀想だとも、良い気味だとも思わなかった。ただ、なぜ罪人を閻魔堂へ引いて行くのかと不思議に思った。まもなく本物の閻魔のもとへ出向くというのに、作り物の閻魔に許しを請うたところでどう

にもなるまい

切り落とされたおとこの首は、血を洗い落として獄門台に晒された。晒されたところで誰も見に来るものもなかるうにと、えんは少しそのおとこを哀れに思った。

闇の中で見る刑場は、昏間と変わらなかつた。鬼火が出るわけでも、獄門台の首が目を剥くわけでもない。ただ、いつもの通り静まり返っていた。

刑場を囲む竹矢来をくぐって、えんは刑場の中にもぐりこんだ。もちろんおとこの胴はすでに持ち出され、血溜め穴は埋められている。薙も取り払われ、ただ四角い穴の跡だけが残っていた。それらをざっと眺め、えんは獄門台のそばへ行ってみる。

捨て札と仰々しい捕り物道具か飾られた台の隣に獄門台がしつらえられ、昏間のおとこの首だけが晒されていた。

首は洗われたせいか、おとこの胴についていたときよりもきれいに見える。苦しげというよりはなんとなく悲しげで、血の気のまっただけなくなった顔は、青白く闇に浮かんで見えた。

しばらく、あちらこちらと首を眺めていたが、これ以上どうなるものでもない。やがてえんは興味を失い、再び竹矢来をくぐって外へ出た。

さて、どうしようか。

まだ、月は山の端にのぼったばかりである。二親が帰ってくるにはまだ間がある。えんは少し考えて、閻魔堂に向かった。

扉の隙間から、明かりが漏れている。処刑されたおとこを弔うためか、閻魔堂に珍しくろうそくが燈され、ているのだらう。えんはそつと扉の隙間から、閻魔堂の中を窺った。

？

いつもは、見えないはずのものが見えた。特に違和感はない。しかし、それはそこには無い筈の物だった。

正面の高い壇の上には鮮やかな色に塗られた閻魔王。

黒々とした鉄札を手にした具生神。

左右に赤と青の獄卒鬼達。

壇茶幢、業の秤、浄玻璃鏡。

そこには、地獄の裁きの様が余さず再現されている。そこに欠けているのはただ閻魔王の前に額づく亡者だけである。しかし今、ろうそくの明かりにこうこうと照らされた堂内には、明らかにひとりのおとこが額づいていた。

このような時間に刑場前の閻魔堂にひとがいるとは思われない。あるいはお仕置きになったおとこのゆかりの者かも知れないが、おとこを知る者ならば余計にこのようなところをうるついでにはいないだろう。晒された首を奪いにきたと疑われれば、少なくとも面倒なことになる。

幼いえんが、そこまで考えたとは思われぬが、少なくともこのよ
うな所にひとがいるはずはないと、そこまでは思い至った。

えんはさらにじつと堂の中を覗いた。

ゆらりと、像が動いた気がした。

木造りの閻魔王が、具生神が、獄卒鬼が、一斉にゆらりと動いた。ろうそくの明かりが揺らいだせいかと、えんは右手の甲で両の目をこすった。

再びのぞいたえんの目に、きらりと光るものが映った。のっぺらとした木の板だった浄玻璃の鏡が、ろうそくの明かりを映して輝いていた。

ああ。

えんは、理解した。

ここは、地獄の裁きの場なのだ。

額づいているのは、そこに晒されている罪人ではないか。

これから、ここで、おとこの裁きが始まるのだ。

何もおかしいことはない。

おとこは死んでいるのだから。

えんはそつと堂のとびらを開けた。
ざわりと場がざわめいて、生氣を持った異形の者達の視線がえん
に向けられた。

ほう。

と、そう云つたのは閻魔王だった。

「珍しい客だ。我等が見えるか。」

咄嗟に身構える獄卒鬼を片手で制し、閻魔王はえんに笑いかけた。
えんは肯くと、獄門台に首を晒しているおとこに目を向けた。

「そのひと、どうなるの？」

閻魔王はぎろりと目を剥いた。

「知りたいか。」

えんは肯いた。

「ならば、ここで見ておるがいい。さて具生神」

「はい、閻魔王様。このおとこが行つた悪行善行のすべては、この
鉄札に誤り無くまた余すところ無く刻んでございます。」

黒々と光る鉄の札を具生神がおとこに向けると、おとこは慌てた
様に視線をそらした。

「青鬼、赤鬼。とくと見せてやれ。」

閻魔王の言葉とともに、青と赤の獄卒鬼がおとこに走り寄り、後
ろ頭を& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まえて鉄札の方へ捻じ向ける。

「どれが悪行でどれが善行か、具生神、示して見せよ。」

「はい。こちらが悪行にございます。」

具生神が鉄札の大半を指し示す。

「さて、では善行はどこにある。」

「こちらの隅にございます。」

具生神が指し示した鉄札の隅にほんの数行刻まれた、それがおと
この善行のすべてであるらしかった。おとこが絶句した。

「これはずいぶんな悪人であるな。具生神、この悪人におのれの悪
行を読み聞かせてやれ。」

「はい、それでは。こまごまとした悪行をあげれば切りが在りませぬが、まずは幼き頃堂宇へ盗みに入った、これが罪の犯し初めにございます。その後は本格的に盗みを覚え、やがては商家も武家も寺家も見境無く、己のもの人のものの区別もなく、押し入り奪う愚かしき所業に及び、さらには盗みのついでと女を犯し、人に見られればこれを殺し、後を追われぬように火をかけるなど悪行に悪行を重ね、とうとう捕らえられしたものの、その悪行のほとんどに口をつぐみ、首を晒してはおるものとても十分な罰を受けたとは申せませぬ。このうえは閻魔王様より、厳しき御処断を下されますがよろしかろうと存じます。」

具生神の口上に、閻魔王はうむと肯いた。

閻魔王の目の前では、容赦ない断罪を受け残酷な現実から目をそらすうともがくおとこを、獄卒鬼達が押さえつけている。

「どうだ、何か申し述べることがあるか。」

閻魔王の問いに、おとこは必死の形相で訴える。

「たしかに、わたしは盗みもし、殺しもし、犯しもし、火をかけたも致しました。しかしそれは生きてゆくため、生き抜くため。殺し、火をかけたのも数度のことでございます。」

「言い訳にはならぬな。大抵のものは殺しも火付けもせぬままに一生を過ごす。また、盗み犯すことがあつてもせいぜい数度の過ち。

おまえの悪行が度を越していることは明らかであろう。」

必死に訴えるおとこの言葉を、閻魔王は一蹴する。当然だ。

と、えんはそう思う。おとこの悪行が哀れみを請うには度が過ぎていることは、幼いえんにも十分に判る。

「ほかに云うことが無ければ、おまえには地獄行きを申し付けるが、それで不満はあるまいな。」

おとこの顔から、すうと血の気の引くのが見て取れた。その顔は、外で晒されている首にそっくりだった。

「お、お待ちください。」

最後の足掻きとばかりに、おとこが叫ぶ。

「この期に及んでまだなにか申すことがあるというか。」

じろりと閻魔王がおとこを睨みつける。しかし、ここで引き下げれば地獄行きのおとこは、必死で訴える。

「どうか、善行もお調べください。少ないとはいえ、なにか身を救うことが無いとも限りません。どうか。」

涙を浮かべ、地に額を擦りつけて哀願するおとこに、閻魔王は仕方がないとばかりにため息をつき、具生神に命じて言った。

「善行を読み上げよ。」

「はい。善行としてここに刻まれたものは、たったの三つにございます。一つは捨て子を養ったこと、しかしこれはその子どもを長じてから盗人として仕込んだことで帳消しになっております。またもう一つは貧者に金品を施したこと、もつともこれは他人から盗み取ったものでありますからこれもまた帳消しとなりましょう。最後は通りすがりに溺れた子どもを助けたこと。これは無心でしたことですから、帳消しにはなりません。ただひとつ、これだけがこのおとこの善行と云えるようでございます。」

「そうか。ところでその子どもは、今も生きておるか。」

問われて具生神は懐からなにやら帳面のようなものを出してしばらく繰っていたが、やがてようやく探し当てたのか顔を上げた。

「生きております。まだ助けられたことは忘れていないようで、このおとこを誰とも知らず感謝している様子でございます。」

一抹の希望に、おとこはさすがのような目で閻魔王を見上げている。

「そうか、よかるう。」

具生神がかしこまる。

「おとこよ、やはりおまえは地獄へ行くがよい。人の命を大切に思うその気持ちがありながら、多くの命を奪ったその罪は重い。」
うう。と呻いておとこが頂垂れた。

「青鬼赤鬼。このおとこを焦熱地獄へ引いてゆけ。おのれの放った火に焼かれ、おまえが害した人々の恨みの炎に灼かれて苦しむがよい。焦熱地獄の亡者の寿命はたっぷり一万六千年、それだけあれば

お前が背負う重い罪もつぐない切れよう。」

悄然と頂垂れるおとこの口から、嗚咽がもれた。

「なにを泣く。おのれのつくった悪因が、おのれに還るのは当然のことであるう。しかしまた、善因もまたおのれに還る。たとえわずかなりとおまえの中に善因をつくる心があるならば、そして悪行を悔いる気持ちがあるならば、善果は必ずおまえに還ろう。」

おとこが涙に濡れた顔を上げる。閻魔王は穏やかな顔つきで、おとこを見下ろしていた。

おとこが赤青の獄卒鬼達に引かれてゆくのを、えんはじっと見つめていた。

「どうだ。」

閻魔王がえんに尋ねる。

「あのおとこは、焦熱地獄へと墮ちた。哀れと思うか、当然と思うか。」

えんは首をかしげる。そもそも地獄の様を知らぬのだから、どうにも答えようがない。一部始終を見る限り、地獄というものが罪を責められるところなのか、また赦されるところなのか、えんにはどちらとも判断がつかなかった。

「あのひとは、どうなるの。」

だからえんは、はじめと同じことを閻魔王に問うた。

閻魔王はおどろいたように笑った。

「なかなか思慮のある子どもだ。名はなんと云う。」

「えん。」

真つ直ぐに答えるえんに、閻魔王は再び笑った。

「そうか、えん。教えてやろう。地獄とは、いやすべてこの世界というものは、おのれの為した善因悪因のめぐるところ。ただそれだけのこと。あのおとこがどうなるか、それは誰にも分らぬ。」

えんはふうと息をついた。なにかがまだ胸の辺りにつかえているような、そんな気持ちだった。

「えん。地獄というものを、おまえに見せてやるつか。」
えんは肯いた。

そうか、見たいかと、閻魔王は三度笑った。

「よかるう、見せてやる。しかし今宵はもう時も遅い。二、三日したら、またここへ来るがいい。ろうそくを灯して待っていていよう。さあ、もう帰るがいい。月も上った。」

いわれてえんが振り返ると、堂のとびらの隙間から中空にかかるこうこうと光る月がのぞいていた。

一瞬の後、再び堂内に目を戻すと、すべては消えていた。いや、消えたわけではない。正面の高い壇の上には鮮やかな色に塗られた閻魔王。黒々とした鉄札をした具生神。左右に赤と青の獄卒鬼達。壇茶幢、業の秤、浄玻璃鏡。なにひとつ欠けてはいない。ただそれらのすべてがたましいを失い、ただの木像に戻っていた。

のっぺらとした木の板に戻ってしまった浄玻璃鏡に目をやって、えんは閻魔堂を出た。中空にかかる月はこうこうと辺りを照らしていたが、扉の隙間からのぞいていた月よりも色あせていた。えんはそのままねぐらへ戻った。

それから毎夜、えんは閻魔堂の様子を見に行った。刑場にはおとこの首がそのまま晒されていた。日がたつにつれて鴉に突付かれ、蟲にたかられ、首は次第に無残な様を晒していったが、それはただの首だったから、えんはなんとも思わなかった。

数日が過ぎて、宵の風がすっかり春風に変わり、閻魔王は約束を忘れたのかとえんが疑い出した頃、閻魔堂に明かりが点った。

ようやくのびだした春草の匂いが、風に混じって鼻に届く。そんな穏やかな春の宵の薄闇の中に、閻魔堂の明かりが明るく光っているのを見つけて、えんは闇の中を駆け出した。

閻魔堂のとびらの前で、それが儀式でもあるかのように、えんはそつと立ち止まり隙間から中をのぞいた。

正面の高い壇の上には鮮やかな色に塗られた閻魔王。黒々とした鉄札を手にした具生神。左右に赤と青の獄卒鬼達。壇茶幢、業の秤、浄玻璃鏡。浄玻璃鏡がきらりと光るのを、えんは見た。

「何をしておる、入るがいい。」

閻魔王が言った。えんは急いでとびらを開け、その隙間から堂の中へ滑り込んだ。

「遅くなつてすまなかつた。」

えんはくびを振った。

「さて、春の宵は短かろう。さつそく、参るか。えん、怖ろしくはあるまいな。」

問われてえんは肯いた。怖ろしいとは、少しも思わなかった。相変わらず怯えることをしないえんを見て、閻魔王はこの間と同じように笑った。

「ならば行くぞ。この青鬼赤鬼はおまえを守るために連れてゆこう。おまえには乱暴を働かぬゆえ、心配は無い。」

怖ろしげな顔はしていたが、この獄卒鬼達のことも、えんは怖ろしいとは思わなかった。

「では具生神。」

「はい、心得ております。」

うむ。と閻魔王が肯いたとたん、えんはすうと何かが変わる気配を感じた。

「えん。」

促されて、えんは堂のとびらを開けた。

吹く風の匂いが変わっている。夏の昼下がりを思わせるねっとりとした熱風は、腐臭のような濃密な匂いを含んでいる。真夏の処刑場から吹いてくる風に、それはどこか似ていた。遠くそびえる山は形を変え、山の端にかかっていた半月は姿を消して、空は灰色の闇に覆われていた。

「ここが本来の閻魔の庁。向こうに広がるのが、地獄というものだ。」

閻魔王の声にえんが振り返ると、見慣れた閻魔堂は姿を消し黒々とした鉄の門がそびえている。えんが開けたとびらは厳めしい鉄の門のとびらになっていた。

とびらの内側もまた狭い閻魔堂ではなく、広い空間に変わっていたが、そこにあるものは変わらない。

正面の高い壇の上に鮮やかな衣装をまとった閻魔王。脇に控えるのは黒々とした鉄札を手にした具生神。左右に赤と青の獄卒鬼達。壇茶幢、業の秤、浄玻璃鏡。壇茶幢のふたつの首はえんを見下ろし、業の秤はゆらゆらと揺れ、浄玻璃鏡がなめらかに光っている。そのさまを、えんはじつと眺めた。

「ものに驚かぬ子だ。えん、見るがいい。」

閻魔王は高い壇を降り、えんを促して門のとびらを押し開けた。

「閻魔の庁は中有と地獄の境にある。中有とはまだ何処へ行くか決まっておらぬ亡者達がさまよつところだ。寿命の尽きた者達は皆こ

「ここからいずれの所へか生まれてゆく。」

「このあいだのひとも？」

「そうだ、ここから地獄へと生まれていった。えんは六道というものを知っているか。この世の中には人の世や地獄ばかりではなく、みなで六つの世界がある。ひとはみなこの六つの世界を、おのれのつくった善因悪因にしたがって生まれ変わり死に変わり、めぐっている。」

えんは黙って聞いていた。そしてふと、自分もいつか地獄へ生まれることがあるのかも知れないと思った。いや、もしかしたらこれまで、幾度か生まれたことがあるのかもしれない。人に生まれたのも、これが最初ではないのかもしれない。

「おまえもいつか、ここからどこかへ生まれ変わっていくだろう。」
えんの思いを読み取ったかのように、閻魔王はそういった。

「さて、えん。地獄を見に行け。閻魔王の庁のから左右に延びる黒鉄の扉の内が、一層目の等活地獄。あとの地獄は一層ずつ下に連なっている。案内は赤青の獄卒鬼が務めよう。わしは、具生神とともに新たにやってくる亡者どもを裁かねばならぬ。十分に地獄をめぐったら、再びここへ帰ってこい。」

後ろに、青鬼赤鬼が控えていた。えんが傍へよると赤鬼がえんを抱え上げ、肩へと乗せた。

「気をつけてゆけ。」

閻魔王の言葉にえんは肯き、鬼達は一礼して地獄の入り口へと向かっていった。

大きなその門は、閻魔王の庁と同じ黒鉄の門であったが、厳めしいというよりはおどろおどろしいような威圧感で辺りを睥睨していた。門前に立つものを威嚇するようなその門を、しかしえん達はじつにあっさりと越えていった。

くぐったのではない。獄卒鬼達はえんを肩にのせたまま、宙を駆け回っているのだ。えんはしっかりと鬼の首に手を回し、落ちないように

しがみついている。それでも、宙に浮くというのは心地よかった。眼下には、一層目の地獄が広がっている。かすかに聞こえる亡者達の叫び声を聞きながら、えんは足元に広がる地獄を見下ろした。無残な様であるう。」

地獄を見下ろすえんに、赤鬼が言った。

確かに無残な様ではあった。眼下に見下ろす亡者達は、互いにかみ合い害しあっては倒れ呻いている。弱いものはたちまち倒れ、つかみ合いに勝ち残ったものは獄卒の手で打ち潰されている。血に濡れて重なり合う亡者達のさまは、えんに遠い昔のいくさとやらを連想させた。

それにしても　　しまいにはひとり残らず呻き倒れ伏し死んでゆくというのに、なぜ彼らは争い害しあうのか。

「なぜと行って、そうしたものがあるからこゝへ墮とされるのだ。」

えんが尋ねると、青鬼が云った。

「こゝへ墮とされるのは、争いを好み力に頼り、ひとを害して優位に立とうとあがいて来た者たち。たとえ力で優位に立ったところで、いずれは力でその座を追われ、やがてはおのれの業の報いを受けてこゝへ至り、それでもまだ争うことの愚かさを知らず、こつして争い続けている。」

「いつまで？」

「争うことの愚かさを知るまでだ。」

「いつまでも？」

「寿命は五百年と定められているが、大抵はそれほどかかるまい。五百年たつても解らぬ愚か者は、次の世に悪果を持ち越すだけのこと。」

ふわりと涼しい風がえんのほおをなでてゆき、いつのまにやら動くものの無かった眼下で、亡者達がふたたび争いを始めている。彼らはこの荒涼とした景色の中で、幾度も幾度もこのようなことを繰り返しているのだろう。

幼いえんが愚かと思うことを、大の大人がわからぬものかと、え

んは少しこっけいにそして哀れに思った。

「えん、あちらを覚えてみる。」

二層目の地獄である。赤鬼が指差すそこには、大きな釜が据えてある。

煮え立つ釜から上がる湯気の熱気が、えんの所にまで伝わってくる。釜の両側には太い黒鉄の柱が立ち、湯気に隠れた釜の真上には、その柱から柱へと鎖が一本張り渡してあるらしい。

渡された鎖の右半分には、背中に何かを背負った亡者達が取り付いている。左側には亡者の姿はない。鎖の中程はもうもつと上がる湯気と煙に隠れて、えんの目には見えなかった。

「えん。あの者たちは盗人だ。おのれがこれまで盗みためてきたものを背に負って、ひとの世にあつた頃の生き方そのままに、あやうい鎖の上を渡らせられている。どれほど身の軽いものでも、罪あるものはあの鎖は渡りきれぬ。みよ、誰一人として鎖を渡りきるものが無いであろう。」

もうもつと上がる湯気の中にじっと目を凝らすと、ぐらぐらと煮えたぎる湯の中に落ちてゆく亡者達の姿が影のように見えた。耳を澄ませば泣き叫ぶ亡者達の声、亡者達を柱の上に追い上げる獄卒鬼達の怒号、落ちてゆく亡者達の悲鳴が聞こえてくる。

「落ちたらしまい？」

「むろん一度で終わりはしない。おのれの罪の重さを知るか、千年の寿命が尽きぬうちは、ああして釜の中から掬い上げては追い上げられる。」

煮え立つ釜をかきまわす獄卒が、棒の先でぐったりとした亡者を掬い上げるのが見えた。

えんは少しだけ、ぞくりとした。

近所の悪がきどものなかで、えんは悪さなどしないほうであったが、それでも幾度か些細なものをそつとふところやたもとにしなければならぬ事がある。

「えん。おまえもなにか盗んだことがあるか。」

少し不安げなえんの様子を察したのか、青鬼が問う。

えんがあわててくびを振ると、青鬼は少し怖い顔になった。

「えん、うそをつけば罪は重くなるぞ。悪因にさらに悪因を重ねれば、悪果は大きくなるばかりだ。うそを重ねたものがどうなるか見せてやるう。」

青鬼が促すと、赤鬼はえんを肩に乗せたまま、ぐんと下へ向かって降りていった。

ぐんぐんと下り、何層かの地獄を通り抜けて、青鬼赤鬼はようやく止まった。

「さあ、えん。あれを見る。」

青鬼が厳しい顔で指差す先を見ると、柱へくくられた亡者が舌を抜かれるところだった。

舌を抜かれまいと引き結んだ口を鉄鉤でこじ開けられて泣き叫ぶ亡者の口の中から、黒々と光る鉄の鉄鉤が亡者の舌を挟み出す。おどろくほどに引き伸ばされた舌はなかなか抜けず、亡者は痛みを身をよじっていた。

「どうだ、えん。ここがうそをつく者の墮ちる地獄だ。舌を抜かれるのは痛いぞ、これでもうそをつくか。盗みをしたことがあるならあると素直にそう云って、これから後は二度とせぬことだ。盗みをしたことがあるのであろう?」

えんはうなだれて肯いた。ぶつりとかすかに音がして、眼下から呻き声が上がった。舌を抜かれた亡者が、口から血を吐いてもがいていた。

「それ、みよ。」

しばらくすると抜かれた舌は生えてくるようで、獄卒鬼たちがそのたびに泣き叫ぶ亡者の口をこじ開けて舌を引き出す。足元にはたちまち幾枚もの舌が抜かれて散らばった。

「見よ、えん。おのれの罪をみとめ心底悔いるまで、抜かれても抜

かかれても舌は生えてくる。いつまでもうそで罪を覆い隠そうという者には、八千年の寿命が用意されている。罪を犯せば悪果を生むが、罪を認めねばさらなる悪果を生む。認めぬ罪はつくなうこともできぬであろう。」

青鬼の言葉にえんは頂垂れた。

「だが、えん。心配は要らぬ。」

青鬼の言葉にうなだれるえんに、赤鬼が言った。

「うそをつく者は確かにおのれの罪から目をそらそうという者が多いが、しかしあれほど叱責され、繰り返し繰り返し痛い目にあつて分からぬ者はそうそうおらぬ。やがては罪を悔いることになるう。罪を悔いる心は善果を生む。罪を悔いる者はすでに善因を積み始めているのだ。だからえん、罪を悔いるならお前もまた、すでに善因を積み始めている。些細な罪なら生きているうちにひとの世でつくなう事ができよう。」

えんは少しほっとした。

「さて、えん。ここまで来たのなら、この間のおとこがどうしているか見に行つてみるか。」

えんが肯くと青鬼赤鬼はまた、一層下の地獄へとすうと降りはじめた。

「今の地獄がうそを重ねるものが墮ちる大叫喚地獄、この間のおとこが墮ちた焦熱地獄はこのすぐ下にある。炎の燃え上がる熱い地獄だ、えん、落ちぬ様にしつかりとつかまっておれ。」

赤鬼の言葉の通り、轟々と炎の燃え盛る音が聞こえた。辺りはぐつと熱さが増し、火に炙られているようにさえ感じる。自分の体が焼けてしまいはせぬかと、少しばかり不安になって、えんは赤鬼にしがみつく。

「熱いか、えん。燃えはせぬから心配は要らぬ。下にいる亡者どもを見てみよ。ここにもこれだけ熱いが、下はこのようなものではないぞ。」

赤鬼にしがみついたままそつと下をのぞくと、立ち昇る陽炎に揺らめく灼熱の大地を、わずかな涼を求めて亡者たちがふらふらとさまよい歩いている。焼けた大地は触れるたびに亡者の足を焦がし、焼けつく大気は亡者たちの咽喉や肺を容赦なく焼く。歩き、息をするさえ辛そうである。

「あれはまだ、焦熱地獄の責め苦ではない。あの亡者どもはただ地獄の中をさまよっているだけ。亡者どもを待ち受ける地獄の炎は、ほれそちらに燃え上がっている。」

指をさされて振り返ると、炎が大きく燃え上がっている。燃え盛る炎のまわりでは、目を覆いたくなるような光景が繰り広げられていた。

「どうだ、えん。この間のおとこはおるか。」

青鬼が問う。えんは苦しみ呻く亡者たちの中に、おとこの姿を探した。

獄卒鬼達に捕らえられ、引き据えられた数々の亡者たち。炎の上に渡した金網に括り付けられている者。灼けた金串で一突きにされ炙り焼かれる者。焼け爛れた鉄板の上で打ち叩かれる者。

呻き叫ぶ亡者たちの間を丹念に探すと、おとこは金串に貫かれ、炎の中でのたうっていた。

「見つけた。」

えんの指差すのを見て、青鬼が炎のそばへと降りていった。青鬼がおとこを炙っている獄卒鬼に二言三言声を掛けると、獄卒鬼はおとこを貫いた金串を炎の中から抜き出して地面に転がした。

「えん。来て見る。」

青鬼が手招きをする。

「燃えはせぬ。我慢できるか？」

赤鬼がえんに尋ねる。えんは、肯いた。

じりりと熱い大気がえんを襲う。えんは口元を袖で覆った。いくらか息が楽だった。

「見てみる、えん。」

えんはころがつているおとこを見た。おとこの体はすでに焼け爛れ、ひとの形をしていなかった。赤く爛れたかたまりが、痛みに身をよじっていた。

「このままでは話もできまい。」

赤鬼がそう云うと、青鬼は再び獄卒鬼に声を掛けた。

おとこを貫いたままの金串が、獄卒鬼の手で再び炎の中に差し入れられる。おとこの体が大きくもがき、動かなくなった。黒く焦げたおとこの体は、がらがらとくずれて地面に落ちた。

しばらく黒焦げのかたまりはそのままだった。しかしすうつと涼しい風が吹いて、えんがその心地よさに目を細めると、次の瞬間焦げたかたまりはおとこに戻っていた。

「しばし時をもらった。ひとまず怯えずともよい。」

青鬼が云うと、怯えていたおとこは少し落ち着きを取り戻した。

「どうだ、地獄の責め苦は。」

赤鬼が問うと、おとこは口を開いた。

「身を貫かれるはこれほどに痛いか、炎に焼かれるはこれほどに熱いものか、泣き叫んで哀願しても聞き入れられぬことがこれほど辛いのかと、おのれのしてきたことを恐ろしく思っております。これまでどんな悪行をおこなっても、少しも心が痛まなかったというのに、今はおのれの悪行を悔い嘆いているのです。」

「地獄とは、そうしたところだ。悔い嘆いたところで取り返しはつかぬ。おのれの行いはおのれに返る。犯した罪の恐ろしさに震えながら、悪行の報いを受けるのだ。」

「はい。始めはどうしたらこの苦しみから逃れられるかともがきました。どうしても逃れられぬと知ると、あのようなことをしてこなければと後悔しました。後悔し始めると、おのれのしてきたことの恐ろしさに身が震えました。これほど恐ろしい悪行を重ねてきたからには、地獄の責め苦から抜け出すことはできぬであろうと絶望に身が千切れる思いでした。」

しかし、このところもう耐え切れぬと思う苦しみの絶頂にくると、

すうとひととき苦しみのなくなる瞬間があるのです。ときには爛れ乾いた咽喉に、ひとしずくの潤いを感じることをさえあるのです。それに気が付いてからは、地獄の責め苦から抜け出すことができなくとも良いと思えるようになりました。それよりも、どうすれば罪をつぐなうことができるかと考えるようになりました。それを考えれば考えるほど、おのれの罪の重さを思い知らされ、犯した罪を悔い嘆いているのです。」

そう云って、おとこは項垂れた。

「 たすけた子だ。」

えんがつぶやくと、赤鬼が肯いた。おとこが助けた子の感謝が、功德として届いているのだ。

「これだけの罪を犯しながら、おまえは幸運な亡者だ。本来であれば何の救いもなく苦しみ続け、ここから逃げ出すことばかりを考えて、おのれの罪の重さを知るにも時がかかったかも知れぬ。しかしわずかな善根を積んだために、短い間にそこまで考えることができただ。どうして罪をつぐなうかは次の世のこと。よく考えて二度と謝った道を歩まぬが良い。今はただおのれの犯した罪の重さ恐ろしさを、じっくりと感じて苦しむしかない。すべてはそれからである。」

赤鬼が諭すと、おとこはひとつぶ涙をこぼした。

「どうだ、えん。なにか聞いておくことはないか。」

えんは、くびを振った。

おとこがどうなるのかは、分からない。それが分かった。それで、いいと思った。

胸につかえていたものが、取れた気がした。

えんたちは、おとこのもとを後にした。

先程の獄卒鬼が、再びおとこを灼けた金串で刺し貫き、炎の中へと差し入れた。苦しみがく様がえんの目にも見えたが、哀れとは思わなかった。罪を知り、おのれのなすべきことを知ったおとこは

哀れではない。そう思った。

「さて、えん。そろそろ閻魔王のもとに帰るか。おとこがどうなるのか、分かったであろう。」

えんは、肯いた。

赤鬼の肩に乗せられたまま、えんは閻魔の庁に戻った。閻魔の庁では、閻魔王がえんを待っていた。

「どうであった、えん。あのおとこがどうなるか、分かったか？」

「うん。」

と、えんは肯いた。

おそらくあのおとこはおのれの罪に苦しんだ後、いずれどこかへ生まれ変わっていくのだろう。

その先は、誰にも分からない。

「えん、地獄はどのようなところであった？」

えんはしばらくくびをかしげて考えた。辛く、恐ろしいところではあるのだろう。しかしそれだけではない気がした。辛いとか、恐ろしいとか、無残であるとか、そうしたことは上っ面のことに過ぎない。獄門台に晒されたおとこの首と同じである。中身はそこにはない、とそう思った。

「どうした、見てきたのであるう？」

閻魔王の言葉に、えんは少し考えて、

「おとうとおかあみたいたった。」

と、そう云った。

閻魔王はふいをつかれたような顔をして、それから笑った。

「えん、またここへ来るがいい。そして時には頼まれごとをしてくれぬか。」

名に負う閻魔王がえんに頼むことなどあるのかと、不思議に思いながらえんは肯いた。

この約束が、長くえんの人生を左右することになるとは、このと

それは七つばかりの頃

。きのえんは思ってもいない。今は懐かしい、幼い日のことである

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0958e/>

それは七つばかりの頃

2008年11月7日06時51分発行